

投稿論文

中学校の教室・保健室・相談室における 「居場所」の心理的機能の検討

杉本 希 映**
庄 司 一 子**

Analysis of Classroom, Healthroom and Counselingroom in Junior High school
from Viewpoint of the Psychological Function of "Ibasho (Existential Place)"

Kie SUGIMOTO
Ichiko SHOJI

本稿では、学校環境が中学生にとってどのような「居場所」としての機能を持っているのかを検討することを目的とした。中学生203名を対象に、学校環境の中の教室と保健室と相談室の3ヶ所を、「居場所」の心理的機能で測定した。その結果、教室においては、他の2ヶ所に比べて「被受容感」が特に高く機能しており、他の機能も高いことが示された。保健室においては、「居場所」の機能は、低いことが示された。相談室においては、すべての「居場所」機能が高く平均していることが示された。また、来室頻度が多くなるとさらに「居場所」機能も高くなることから、よく来室する一部の生徒にとっては「居場所」機能の高い場所となっていることが示された。よって、この3ヶ所の「居場所」としての違いが確認できた。

1. 問題と目的

我が国の中学生の長期欠席者数は、2002年度より減少は見られるものの、2005年度現在、依然10万人を超えている。さらに近年では、登校はしているものの登校忌避感情を有している生徒の問題も指摘されており(古市, 1991; 菊島, 1999; 五十嵐・萩原, 2004)、看過できない問題となっている。

子どもの「居場所」への注目は、そのような不登校問題に発する。1980年代、学校に居場所がない子どもたちのための「居場所」として誕生したフリースクー

※筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程

※※筑波大学大学院人間総合科学研究科

ルが現在の「居場所」への関心の起源であると言われている(安齊, 2003; 住田, 2003a)。1992年には、文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否(不登校)問題について一児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して一」という報告を出し、学校内での「心の居場所」づくりの必要性が指摘された(文部省, 1992)。さらに2003年には、文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課が「子どもの居場所づくり新プラン」(生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室, 2004)により、国の施策として学校外での「居場所」づくりが行われるに至った。このように子どもの「居場所」は、「居場所」がないことへの注目から、学校内外において「居場所」を作るという動きに進展しつつある。

そのような中で、「居場所」を実証的に分析していく動きが、1990年代後半から見られるようになる。これまでの「居場所」に関する実証的研究は、「居場所」の形成要因を探り「居場所感」尺度の作成を行う研究(大久保・青柳, 2000; 堤, 2002; 小畑・伊藤, 2003)、「居場所」を分類してその特徴を明らかにする研究(松田, 1997)、発達のな変化を分析する研究がある(富永・北山, 2003; 住田, 2003b)。これらの「居場所」研究は、個々の「居場所」の形成要因や特徴を明らかにしている。

また、不登校問題から注目された「居場所」であるために、学校適応との関連を検討したものもある。学校適応との関係を分析したものとしては、中学生を対象とした稲葉・西・古川・浅川(2001)の研究、小学校高学年を対象とした豊田・宮崎・大寺・小澤・芳賀(2000)の研究、高校生を対象とした田中・田畠(2004)が挙げられる。これらから、学校内に「居場所」があると、学校適応が有意に高いという結果が明らかにされている。高校生を対象とした檜皮・浅川・古川(2002)の研究では、学校内外の「居場所」と学校適応との関連を分析し、学校の内外に居場所を持つ生徒は、他の生徒(学校内のみ、学校外のみ、居場所なし)よりも、学校適応の中の「学習進路への意識」下位尺度得点が有意に高いという結果を得ている。

このように、学校内あるいは学校外の「居場所」の有無と学校適応が関連していることは、先行研究により明らかにされている。しかし、学校環境が、生徒たちにとってどのような「居場所」となっているのかを明らかにしている研究は、見当たらない。今後、不登校問題に対して、「居場所」という視点からのアプローチを検討していく上で、学校環境の「居場所」機能を明らかにしておくことが、

必要と考える。

杉本・庄司(2006)は、現代の小・中・高校生の「居場所」の心理的機能には、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6つの因子があることを明らかにした上で、「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」におけるそれぞれの「居場所」の心理的機能の特徴の違いを明らかにした。また、児童と関係が深いと思われる8空間(教室・体育館・保健室・職員室・校庭・廊下・登校の道・下校の道)を分析した小玉・真仁田・沢崎(1982, 1983)の研究結果からは、空間イメージの構造は、「解放感の因子」「被包感の因子」「秩序感の因子」からなり、それぞれの空間によって異なったイメージを持っていることを明らかにしている。これらの結果より、学校と言っても、教室や保健室など様々な空間から構成されていることから、それぞれの場所により、異なった「居場所」の心理的機能を有していることが推測されるのである。

以上より、本研究では、学校環境の中の教室・保健室・相談室における「居場所」の心理的機能を明らかにし、比較検討することを目的とする。本研究における「居場所」は、杉本・庄司(2006)に従い、「ここが自分の居場所である」と自己認知している場所であり、日常生活の具体的な場所であることとする。調査時には、そこでの精神状態を限定しないことを考慮し、「いつも生活している中で、特にいたいと感じ、実際にいられる場所」という説明を付記することとした。また相談室は、従来の生徒指導などで教員により使用される部屋ではなく、心の教室相談員またはスクールカウンセラーがいる部屋とした。

2. 方法

(1) 調査対象者

首都圏内公立中学校2校の中学生203名(男子109名, 女子94名)。1年生71名(男子37名, 女子34名), 2年生65名(男子37名, 女子28名), 3年生67名(男子35名, 女子32名)である。

(2) 調査方法

担任教諭により、教室で質問紙を調査対象者全員に配られ、その場で回収された。

(3) 調査時期

1999年10月

(4) 調査内容

- ①フェイスシート：学年，性別，保健室・相談室行く頻度（「行ったことがない」「以前行ったことがある」「たまに行く」「よく行く」の5択）
- ②「居場所」の心理的機能を測定する尺度35項目（杉本・庄司，2006。項目をAppendixに示した。）を教室，保健室，相談室の3ヶ所について回答（「とてもあてはまる」(4)から「ぜんぜんあてはまらない」(1)までの4件法）してもらった。順番効果を考慮し，教室-保健室-相談室，保健室-相談室-教室，相談室-教室-保健室の順番の3つのパターンの質問紙を用意した。

3. 結果

「居場所」の心理的機能尺度の6つの下位尺度毎に，項目の得点を足し，項目数で割ったものを，それぞれの下位尺度得点とした。

(1) 教室における「居場所」の心理的機能の検討

①教室における「居場所」の心理的機能と性別との関連

教室における「居場所」の心理的機能の6つの下位尺度の性差を検討するために，性を要因とする T 検定を行った (Table 1)。その結果，すべての下位尺度において，有意差は認められなかった。

②保健室・相談室来室の有無，頻度との関連

教室の「居場所」の心理的機能の保健室・相談室来室の有無での差を検討するために， T 検定を行ったところ，保健室の有無，相談室の有無とも，すべての因

Table 1 教室における「居場所」の心理的機能の男女別の平均値 (SD) と T 検定の結果

		男子	女子	t 値	
	df	$n = 102$	$n = 92$		
被受容感	187	2.71 (.67)	2.71 (.76)	-.04	<i>n.s.</i>
精神的安定	188	2.43 (.74)	2.34 (.79)	.78	<i>n.s.</i>
行動の自由	190	2.11 (.70)	1.95 (.60)	1.66	<i>n.s.</i>
思考・内省	192	2.12 (.72)	2.14 (.63)	-.22	<i>n.s.</i>
自己肯定感	193	2.34 (.76)	2.19 (.72)	1.45	<i>n.s.</i>
他者からの自由	192	1.71 (.69)	1.56 (.51)	1.72	<i>n.s.</i>

子において有意差は認められなかった (Table 2, 3)。ついで、教室の「居場所」の心理的機能の保健室・相談室来室の頻度による差を検討するために、頻度を要因とする 1 要因分散分析を行った結果、保健室の頻度、相談室の頻度とも、すべての因子において有意差は認められなかった (Table 4, 5)。したがって、保健室や相談室に行く人と行かない人、またその頻度によって、教室が果たしている「居場所」の心理的機能に差がないことが示された。

Table 2 教室における「居場所」の心理的機能の保健室来室経験有無別平均値 (SD) と *T* 検定の結果

	<i>df</i>	保健室来室経験あり		保健室来室経験なし		<i>t</i> 値
		<i>n</i> = 166		<i>n</i> = 28		
被受容感	187	2.71 (.70)		2.69 (.78)		.18 <i>n.s.</i>
精神的安定	188	2.38 (.75)		2.42 (.80)		-.22 <i>n.s.</i>
行動の自由	190	2.06 (.63)		1.88 (.79)		1.34 <i>n.s.</i>
思考・内省	192	2.12 (.67)		2.21 (.69)		-.65 <i>n.s.</i>
自己肯定感	193	2.26 (.74)		2.29 (.82)		-.14 <i>n.s.</i>
他者からの自由	192	1.62 (.59)		1.75 (.77)		-1.05 <i>n.s.</i>

Table 3 教室における「居場所」の心理的機能の相談室来室経験有無別平均値 (SD) と *T* 検定の結果

	<i>df</i>	相談室来室経験あり		相談室来室経験なし		<i>t</i> 値
		<i>n</i> = 55		<i>n</i> = 138		
被受容感	186	2.70 (.70)		2.72 (.72)		-.16 <i>n.s.</i>
精神的安定	187	2.37 (.77)		2.40 (.75)		-.24 <i>n.s.</i>
行動の自由	189	2.15 (.67)		1.99 (.65)		1.58 <i>n.s.</i>
思考・内省	191	2.19 (.70)		2.11 (.66)		.67 <i>n.s.</i>
自己肯定感	192	2.30 (.74)		2.26 (.74)		.33 <i>n.s.</i>
他者からの自由	191	1.70 (.63)		1.62 (.61)		.80 <i>n.s.</i>

Table 4 教室における「居場所」の心理的機能の保健室来室頻度別平均値 (SD) と分散分析結果

	以前いったことがある			たまに時々行っている		よく行っている		<i>F</i> 値
	<i>n</i> = 105			<i>n</i> = 51		<i>n</i> = 6		
被受容感	2.69 (.72)			2.79 (.62)		2.55 (.92)		.55 <i>n.s.</i>
精神的安定	2.33 (.76)			2.47 (.73)		2.50 (.87)		.71 <i>n.s.</i>
行動の自由	2.06 (.64)			2.03 (.63)		2.22 (.73)		.26 <i>n.s.</i>
思考・内省	2.10 (.71)			2.17 (.63)		2.04 (.43)		.24 <i>n.s.</i>
自己肯定感	2.24 (.73)			2.28 (.70)		2.40 (1.17)		.15 <i>n.s.</i>
他者からの自由	1.61 (.58)			1.57 (.51)		2.06 (1.06)		1.91 <i>n.s.</i>

Table 5 教室における「居場所」の心理的機能の相談室来室頻度別平均値 (SD) と分散分析結果

	以前いったことがある	たまに時々行っている	よく行っている	F 値	
	n=30	n=15	n=10		
被受容感	2.68 (.75)	2.70 (.68)	2.79 (.61)	.10	n.s.
精神的安定	2.26 (.87)	2.56 (.67)	2.40 (.57)	.72	n.s.
行動の自由	2.14 (.74)	2.30 (.54)	1.98 (.65)	.64	n.s.
思考・内省	2.11 (.74)	2.45 (.70)	2.03 (.52)	1.53	n.s.
自己肯定感	2.26 (.77)	2.49 (.79)	2.14 (.57)	.77	n.s.
他者からの自由	1.70 (.67)	1.80 (.73)	1.53 (.28)	.52	n.s.

(2) 保健室における「居場所」の心理的機能の検討

①保健室来室の有無との保健室における「居場所」の心理的機能との関連

保健室への来室の有無を聞いたところ、203人中174人はある、29人はないであった。保健室における「居場所」の心理的機能の保健室の来室の有無による差を検討するために、*T* 検定を行ったところ、どの因子においても有意差は認められなかった (Table 6)。保健室に来室したことがない人には、想像で回答してもらっているため、その回答は保健室が果たす「居場所」の心理的機能のイメージと捉えなければならない。したがって、行ったことのない人が想像する心理的機能のイメージと、行ったことのある人に保健室が果たしている心理的機能に差がないことが示されたと言える。

②保健室における「居場所」の心理的機能と性別との関連

以下の分析ではイメージではなく実際の認知を分析対象とするため、来室「なし」と答えた人のデータは除外し、「あり」と答えた174人を対象とした。

Table 6 保健室における「居場所」の心理的機能の相談室来室経験別平均値 (SD) と分散分析結果

	df	保健室来室経験あり	保健室来室経験なし	t 値	
		n=164	n=28		
被受容感	188	1.75 (.73)	1.63 (.66)	.81	n.s.
精神的安定	189	1.94 (.80)	1.85 (.63)	.56	n.s.
行動の自由	187	1.85 (.68)	1.77 (.58)	.54	n.s.
思考・内省	189	1.79 (.79)	1.97 (.67)	-1.13	n.s.
自己肯定感	190	1.49 (.57)	1.44 (.53)	.43	n.s.
他者からの自由	189	2.17 (.90)	2.09 (.94)	.43	n.s.

保健室における「居場所」の心理的機能の性差を検討するために、性別を要因とする T 検定を行った (Table 7)。その結果、「思考・内省」のみで有意差が認められ、男子より女子の方が高かった。

③保健室における「居場所」の心理的機能と保健室来室の頻度との関連

保健室の来室の頻度別による保健室得点の差を検討するために、頻度を要因とする 1 要因分散分析を行った (Table 8)。その結果、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「自己肯定感」において有意差が認められ、多重比較の結果 (Tukey-HSD 法, 5%水準) すべてにおいて、「よく行っている」が「以前行ったことがある」「たまに・時々行っている」より有意に高かった。

Table 7 保健室における「居場所」の心理的機能の男女別の平均値 (SD) と T 検定の結果

	<i>df</i>	男子 <i>n</i> = 83	女子 <i>n</i> = 81	<i>t</i> 値
被受容感	160	1.65 (.66)	1.86 (.79)	-1.81 <i>n.s.</i>
精神的安定	161	1.87 (.78)	2.02 (.80)	-1.26 <i>n.s.</i>
行動の自由	159	1.81 (.67)	1.89 (.68)	-.76 <i>n.s.</i>
思考・内省	162	1.65 (.69)	1.94 (.85)	-2.35 *
自己肯定感	162	1.44 (.56)	1.55 (.58)	-1.26 <i>n.s.</i>
他者からの自由	162	2.20 (.97)	2.14 (.81)	.44 <i>n.s.</i>

* $p < .05$

Table 8 保健室における「居場所」の心理的機能の保健室来室頻度別平均値 (SD) と分散分析結果

	①以前あった ことがある <i>n</i> = 106	②たまに・時々 行っている <i>n</i> = 51	③よく行っ ている <i>n</i> = 6	<i>F</i> 値	多重比較
被受容感	1.70 (.71)	1.78 (.72)	2.55 (.83)	3.99 *	①②<③
精神的安定	1.87 (.78)	2.00 (.78)	2.90 (.64)	5.23 **	①②<③
行動の自由	1.80 (.67)	1.87 (.68)	2.56 (.47)	3.65 *	①②<③
思考・内省	1.73 (.75)	1.88 (.87)	2.17 (.47)	1.30 <i>n.s.</i>	
自己肯定感	1.44 (.55)	1.52 (.55)	2.30 (.59)	7.09 **	①②<③
他者からの自由	2.09 (.89)	2.26 (.94)	2.61 (.57)	1.37 <i>n.s.</i>	

* $p < .05$ ** $p < .01$

(3) 相談室における「居場所」の心理的機能の検討

①相談室における「居場所」の心理的機能と相談室来室の有無との関連

相談室への来室の有無を聞いたところ、202人中58人がある、144人がないと答えた。相談室における「居場所」の心理的機能の相談室の来室の有無による差を検討するために、*T* 検定を行った (Table 9)。その結果、「行動の自由」「思考・内省」「他者からの自由」において有意差が認められた。「行動の自由」では、来室経験がある生徒の方がいない生徒よりも有意に高く、「思考・内省」「他者からの自由」では逆に来室経験がない生徒の方がいる生徒よりも高かった。保健室の場合と同様に、相談室に来室したことがない人には、想像で回答してもらっているため、その回答は相談室に対するイメージと捉えなければならない。したがって、相談室に行ったことのない人が想像する心理的機能と行ったことのある人が実際に感じる心理的機能に差があることが示されたことになる。

②相談室における「居場所」の心理的機能と性別との関連

以下の分析ではイメージではなく実際の認知を分析対象とするため、来室「なし」と答えた人のデータは除外し、「あり」と答えた58人を対象とする。

相談室における「居場所」の心理的機能の性別による差を検討するために、性別を要因とする *T* 検定を行った (Table 10)。その結果、すべての下位尺度において有意差は認められなかった。

③相談室における「居場所」の心理的機能と相談室来室の頻度との関連

相談室の来室の頻度別による相談室における「居場所」の心理的機能の差を検討するために、頻度を要因とする 1 要因分散分析を行った (Table 11)。その結果、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」で有意

Table 9 相談室における「居場所」の心理的機能の相談室来室経験有無別平均値 (SD) と *T* 検定の結果

	df	相談室来室経験あり		相談室来室経験なし		t 値
		n = 54	n = 133	n = 54	n = 133	
被受容感	184	2.18 (.81)	2.15 (.81)	2.18	(.81)	.22 n.s.
精神的安定	183	2.39 (.93)	2.21 (.84)	1.28	(.84)	n.s.
行動の自由	185	2.37 (.87)	2.06 (.77)	2.35	(.77)	*
思考・内省	186	1.75 (.71)	2.01 (.80)	-2.13	(.80)	*
自己肯定感	186	2.12 (.91)	1.92 (.80)	1.51	(.80)	n.s.
他者からの自由	185	1.88 (.72)	2.16 (.83)	-2.13	(.83)	*

**p* < .05

Table10 相談室における「居場所」の心理的機能の男女別の平均値 (SD) と T 検定の結果

	df	男子 n = 25	女子 n = 29	t 値	
被受容感	50	2.08 (.76)	2.26 (.84)	-.80	n.s.
精神的安定	52	2.38 (.86)	2.41 (1.01)	-.10	n.s.
行動の自由	51	2.31 (.88)	2.42 (.88)	-.43	n.s.
思考・内省	52	1.83 (.75)	1.67 (.69)	.81	n.s.
自己肯定感	51	2.06 (.87)	2.17 (.96)	-.43	n.s.
他者からの自由	52	1.92 (.77)	1.85 (.69)	.35	n.s.

* $p < .05$

Table11 相談室における「居場所」の心理的機能の相談室来室頻度別平均値 (SD) と分散分析結果

	①以前いった ことがある n = 30	②たまに・時々 行っている n = 14	③よく行って いる n = 10	F 値	多重比較
被受容感	1.89 (.85)	2.45 (.52)	2.63 (.73)	4.78 *	①<③
精神的安定	1.95 (.89)	2.76 (.49)	3.22 (.76)	12.05 **	①<②③
行動の自由	1.91 (.82)	2.86 (.49)	3.00 (.70)	12.69 ***	①<②③
思考・内省	1.65 (.77)	2.11 (.63)	1.53 (.49)	2.70 *	
自己肯定感	1.75 (.88)	2.51 (.43)	2.76 (1.01)	7.59 **	①<②③
他者からの自由	1.80 (.81)	2.10 (.58)	1.83 (.61)	.82 n.s.	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

差が認められた。多重比較 (Tukey-HSD 法, 5%水準) の結果, 「被受容感」では相談室に「以前行ったことがある」生徒が「よく行っている」生徒より有意に低く, 「精神的安定」「行動の自由」「自己肯定感」では, 「以前行ったことがある」生徒が「たまに・時々行っている」「よく行っている」生徒よりも有意に低かった。

(4) 教室・保健室・相談室における「居場所」の心理的機能の比較

この分析においては, 想像による回答を除外するために, 保健室・相談室とも来室ありと回答した56人 (男子26名, 女子30名) を対象とする。

①性別との関係

ここでは, 場所別に関しては同一固体を用いて繰り返しデータを収集しているため, 性別 (個体間要因) と場所別 (個体内要因) を要因とする反復測定による分散分析を行った (Table 12)。

Table12 「居場所」の心理的機能の場所別・性別平均値(SD)と反復測定一分散分析結果

		被受容感	精神的安定	行動の自由	思考・内省	自己肯定感	他者からの自由
A 教室	男子	2.63 (.72)	2.33 (.72)	2.21 (.60)	2.24 (.75)	2.33 (.80)	1.83 (.74)
	女子	2.71 (.73)	2.34 (.82)	2.14 (.69)	2.09 (.65)	2.18 (.61)	1.63 (.54)
B 保健室	男子	1.39 (.53)	1.58 (.60)	1.80 (.80)	1.45 (.56)	1.24 (.43)	1.87 (.87)
	女子	1.85 (.85)	2.04 (.86)	2.07 (.65)	1.91 (.91)	1.63 (.68)	2.22 (.89)
C 相談室	男子	2.11 (.79)	2.48 (.83)	2.32 (.89)	1.85 (.76)	2.09 (.88)	1.91 (.75)
	女子	2.23 (.85)	2.41 (1.01)	2.38 (.87)	1.67 (.69)	2.14 (.96)	1.85 (.69)
個体間変動	F 値	1.74 n.s.	5.41 n.s.	.31 n.s.	.07 n.s.	.36 n.s.	.05 n.s.
個体内変動	F 値	33.54 ***	12.95 ***	5.15 **	12.00 ***	25.57 ***	2.87 n.s.
		B < C < A	B < A, C	B < C		B < A, C	
交互作用	F 値	1.32 n.s.	2.43 n.s.	.90 n.s.	5.75 **	2.47 n.s.	2.32 n.s.

** $p < .01$ *** $p < .001$

その結果、性別（個体間要因）では、すべての下位尺度で有意差が認められなかった。場所別（個体内要因）では、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「自己肯定感」で有意差が認められた。「被受容感」では、保健室、相談室、教室の順に有意に高くなることが示された。「精神的安定」と「自己肯定感」では、保健室が教室と相談室より有意に低かった。「行動の自由」では保健室が相談室より有意に低かった。「思考・内省」においては、交互作用が認められた。男女別で、場所別の1要因による分散分析を行ったところ、男子では有意差が認められ ($F[2] = 9.23 p < .001$) 多重比較(Bonferroni法)の結果、保健室より教室が有意に高かった。女子でも有意差が認められ ($F[2] = 5.97 p < .01$)、多重比較(Bonferroni法)の結果、相談室より教室が有意に高かった (Figure 1)。

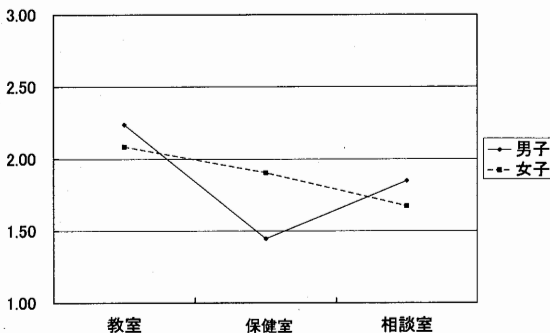


Figure 1 教室・保健室・相談室別における「思考・内省」機能の平均点

4. 考察

(1) 教室における「居場所」の心理的機能

保健室、相談室の来室の有無や頻度で、教室を「居場所」と感じているかに差が出ると推測していたが、有意差は認められなかった。よって、保健室や相談室によく行っている人も全く行かない人も、教室を「居場所」と感じているかに差がなかったことになる。教室に「居場所」がない人が保健室や相談室に行くとは必ずしも言えないことが明らかとなった。このことは、教室に「居場所」がないと感じている生徒は、他の場所にも「居場所」を自ら求めていないことを示唆している可能性があることが推測される。

(2) 保健室における「居場所」の心理的機能

保健室は、性別に関係なく、8割以上の生徒が使用しており、多くの生徒に保健室が利用されていることが明らかになった。また、来室経験がない生徒とある生徒の保健室における「居場所」の心理的機能を比べた結果も差がないことが示された。また、性別との関連では、「思考・内省」のみ女子が高いという結果であった。よって、生徒の保健室に対する認知は、来室経験や性別に関わらずほぼ一致していることが明らかになった。このことは、保健室の役割や機能が生徒に浸透しており、多くの生徒にとって保健室が果たす役割が同じであることを示していると考えられる。しかし、保健室の来室頻度別に見てみると、保健室に行く頻度が多くなるほど保健室における「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「自己肯定感」機能が高くなる傾向が示されている。保健室によく行く生徒は保健室をより「居場所」と感じており、また「居場所」と感じられることが保健室への来室頻度を高める結果ともなっていると考えられる。

(3) 相談室における「居場所」の心理的機能

相談室に行ったことがある人は約3割と、保健室に比べると少なかった。それは相談室がまだ生徒たちにそれほど馴染み深いものとなっていないことと、相談という特別なことをする場という意識が強いため、行きにくいことが要因として考えられる。

相談室の来室経験の有無により、相談室における心理的機能を分析した結果、「行動の自由」では来室経験がある人がない人より高く、「思考・内省」「他者から

の自由」ではない人がある人よりも高かった。相談室に来室経験のある生徒は、「行動の自由」を高く感じているが、「思考・内省」「他者からの自由」は低いと感じている。相談室に行ったことのない人は「思考・内省」と「他者からの自由」が高い場所としてイメージしているが、実際にはそれらの機能は高くないということが言える。

ついで、相談室における「居場所」の心理的機能と性別との関連は認められなかったが、来室頻度によっては有意差が認められた。「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「自己肯定感」は、来室頻度が多いほど高く感じていることが示された。保健室と同様、相談室によく行く生徒は相談室をより「居場所」と感じており、また「居場所」と感じられることが相談室への来室頻度を高める結果ともなっていると推測される。

(4) 教室・保健室・相談室における「居場所」の心理的機能の比較

「居場所」の心理的機能を場所別に比較すると、「被受容感」では保健室<相談室<教室、「精神的安定」では保健室<(相談室 教室)、「行動の自由」では保健室<相談室、「自己肯定感」は保健室<(教室 相談室)、「思考・内省」のみ性差が認められ、男子では保健室<教室、女子では相談室<教室、という結果が示された。

「居場所」の心理的機能は大きく見ると、「他者からの自由」以外の機能では、教室と相談室が高い傾向が明らかにされた。小玉ら(1983)の研究で、教室は他の学校空間に比べて「解放感」「被包感」が高く「秩序感」が低いと言う結果が示されている。小玉らの結果と同様、本研究からも中学生は変わらず他の空間と比べて教室に対し良いイメージを持っており、教室が「居場所」の心理的機能を高く有する場となっていることを示している。特に、「被受容感」が他の2つの場所より高く機能していることから、他者との関係で生徒に「居場所」を感じさせていることが特徴と言える。逆に考えれば、友人が少ない人や不登校・相談室登校の生徒にとっては、「居場所」とはなりづらい場所と言えるだろう。

保健室は、「思考・内省」「他者からの自由」機能が、教室・相談室と比べて差がないが、他の4つの心理的機能は低いという特徴を持っている。小玉ら(1983)の研究における、生徒は保健室に対して「緊張解消的な面での情緒的意味」を持った「静的」な空間をイメージしているという結果と比べても、本研究の「思

考・内省」「他者からの自由」が他の場所と同程度の機能を果たしているということは妥当と言える。他の機能は低い、それは保健室が、多くの生徒にとって、体調が悪い時に行く所であって、特別「居場所」と感じられなくても必要があれば行く場所であるという、保健室の役割と関係していると考える。しかし、よく来ている生徒にとっては「居場所」として機能していることは、来室頻度別に分析した結果から明らかにされている。生徒全体から見ると「居場所」としての機能は低い、利用している生徒の一部には「居場所」となっている可能性があるというのが、保健室の特徴と言えるだろう。また生徒の多くが来室経験を持っており、行きやすい場所であるということも特徴と言える。

相談室は、すべての心理的機能が平均しておりバランスが良いのが特徴と言える。教室ほどではないが「被受容感」も高く、「精神的安定」「自己肯定感」も教室と同じぐらい高く機能しており、他の場所と比べて「行動の自由」は最も高くなっている。また、来室頻度が多くなるとさらに「居場所」の心理的機能も高くなることから、相談室が生徒の「居場所」となる可能性があることを表していると言える。しかし、相談室の来室頻度は約3割と保健室に比べて圧倒的に低い。現時点では、相談室は、来室している少数の生徒のための「居場所」となっていることがうかがえる。

5. 総合的考察と今後の課題

本研究では、中学校の学校環境における「居場所」の心理的機能を検討した。その結果、教室・保健室・相談室の「居場所」機能の特徴が明らかとなった。教室は、特に「被受容感」機能が高く、他の心理的機能も高かった。保健室は、多くの生徒に利用されているが、「居場所」としての機能は低い。しかし、来室頻度が高くなると、「居場所」機能も高くなることが示された。相談室は、利用者は少ないが、全ての心理的機能を安定して高く有しており、特に来室頻度の多い少数の生徒にとっては、さらに高い「居場所」機能を有していることが示された。

教室は、「被受容感」機能が高いが、これはクラスの友だちとの関係、教師との関係が影響していると考えられる。したがって、逆に、クラスでの対人関係に問題を抱えた生徒にとっては、「居場所」とは感じにくい場所となるという危険性も有していると考えられる。教室に「居場所」を感じられるようになるためには、友だち関係、教師との関係にアプローチする必要があると言える。

保健室は、多くの生徒に利用されているが、「居場所」としての機能は低い。それは、体調が悪い時あるいは怪我をした時に利用するという保健室の役割が、生徒に浸透していること、保健室自体が「居場所」として機能することは難しいことを表わしている。しかし、来室頻度が多い生徒にとっては、「居場所」の機能も高いことが示されている。養護教諭は、よく来る生徒の中で、教室に行きながらいない生徒や悩みや問題を抱えている生徒に気づきやすいため、担任教諭やスクールカウンセラーと連携しての対応がしやすい立場にあると言える。したがって、保健室を生徒の「居場所」にするというのではなく、生徒に利用しやすいという特徴を生かし、教室あるいは相談室への橋渡しの場所としての役割が期待できるのではないだろうか。

相談室は、「居場所」機能の高い場所であるが、利用する生徒が少ないことから、多くの生徒が気軽に利用できる場所ではないことがうかがえる。このことが、学校では得られにくい「行動の自由」を高めることになっていると考えられる。今回は、調査対象には含まれなかったが、相談室登校をしている生徒にとっては、おそらく「他者からの自由」などの機能も高いことが予想される。したがって、相談室は、教室に「居場所」を感じられない生徒や、不登校生徒など、学校適応に問題を抱えている生徒に対して、「居場所」としての役割が期待できる。相談室という守られた空間、限られた対人関係の中ではあるが、教室と同様の「居場所」の心理的機能を得ることができるということは、教室では得られない「居場所」機能を補う、補完的な場所としての役割を果たし得ると考えられる。

以上の様に、「居場所」という視点から見た時に、学校環境のそれぞれの場所は、その有している心理的機能が異なっていることが明らかとなった。各場所の持つ「居場所」機能を理解し、利用することで、不適應問題を抱えた生徒へ対応が可能になると考えられる。

今後の課題としては、調査対象者と調査場所の2点が挙げられる。今回の調査対象者は、学校に通っている生徒が対象であり、不登校生徒あるいは保健室登校、相談室登校をしている生徒は含まれていない。これらの生徒にとっては、また異なった結果が推測される。これらの生徒の「居場所」機能については、インタビュー調査など質的研究を行っていく必要があると考える。調査場所については、今回の調査では、教室、保健室、相談室という3ヶ所を選択した。しかし、学校には他にも、部活動の場所、図書室、職員室など様々な場所がある。中学生にと

って、学校内のどのような場所がどのような「居場所」機能を有しているかを、さらに検討して行く必要があると考える。

引用文献

- 安齊智子 2003 「居場所」概念の変遷 発達, 24, 33-37.
- 古市裕一 1991 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 檜皮万里子・浅川潔司・古川雅文 2002 高校生の居場所と学校適応に関する研究 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 83.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-275.
- 稲葉小由紀・西悟史・古川雅文・浅川潔司 2001 中学生の学校適応と居場所に関する研究 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 455.
- 菊島勝也 1999 ストレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究, 7, 66-76.
- 小玉正博・真仁田昭・沢崎達夫 1982 児童・生徒の学校環境に対する空間イメージの構造と学校適応に関する研究—予報1:小学生の場合— 教育相談研究, 20, 25-41.
- 小玉正博・真仁田昭・沢崎達夫 1983 児童・生徒の学校環境に対する空間イメージの構造と学校適応に関する研究—予報1:中学生の場合— 教育相談研究, 21, 1-15.
- 松田孝志 1997 現代高校生における居場所の内包的な構造 筑波大学教育研究科カウンセリング専攻修士論文抄録集, 31-32.
- 文部省 1992 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して(学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会会報, 44, 25-29.
- 小畑豊美・伊藤義美 2003 中学生の心の居場所の研究—感情と行動及び意味からの考察— 情報文化研究, 17, 155-167.
- 大久保智生・青柳肇 2000 心理的居場所に関する研究(2)—居場所感尺度作成の試み— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 161.
- 生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室 2004 子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業の実施にあたって 教育委員会月報, 656, 2-25.
- 杉本希映・庄司一子 2006 「居場所」の心理的構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 住田正樹 2003a 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南博文(編)子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 Pp.3-17.
- 住田正樹 2003b 子どもたちの「居場所」と対人関係 住田正樹・南博文(編)子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 Pp.101-168.
- 田中麻貴・田篤誠一 2004 中学校における居場所に関する研究 九州大学心理学研究, 5, 219-228.

- 富永幹人・北山修 2003 青年期と「居場所」 住田正樹・南博文(編)子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 Pp.381-400.
- 豊田英昭・宮崎世津子・大寺せい子・小澤暁・芳賀明子 2000 小学校高学年児童の「学校における居場所」の研究Ⅲ—自分の教室の居心地と学校適応感— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 461.
- 堤雅雄 2002 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 高根大学教育学部紀要 人文・社会科学, 36, 1-7.

Appendix 「居場所」の心理的機能尺度(杉本・庄司, 2006)

質 問 項 目	
I 被受容感	III 自己中心
自分を本当に理解してくれる人がいる	自分の好きなことができる
悩みを聞いてくれる人がいる	自分の好きなようにできる
人と一緒にいられる	自由だ
ひとりじゃない	自分の物がある
自分はそのメンバーである	自分だけの時間がもてる
自分は大切にされている	寝ることができる
人のために何かができる	IV 思考・内省
II 精神的安定	自分のことについてよく考える
満足する	物思いにふける
無理をしないでいられる	1日のことを振り返る
本当の自分でいられる	ボーっと考えこむことがある
幸せ	V 自己肯定感
おもしろい	何かに夢中になれる
素直になれる	自分の能力を発揮できる
楽しい	好きな物がある
自分らしくいられる	自分はいまよくやれる
誰にもじゃまされない	自分に自信がもてる
安心する	VI 他者排除
	他人のペースに合わせなくていい
	人を気にしなくていい
	人に会わなくていい